

入選

上田 愛花(うえだ あいか) 鎌水中 1年生

作品名:アンが教えてくれた努力の大切さ

図書:赤毛のアン

努力する。誰もが一度は努力したことがあると思う。私は努力は勝つためにするもので、勝つことが大切だと考えていた。だが、「赤毛のアン」を読んでその考えは大きく変わった。

「グリーン・ゲイブルス」にやって来た赤毛の孤児の女の子アン・シャーリー。おしゃべりと想像が大好きなアンは、たくさんの愛情とおかしな騒動で成長していく。

物語の中にアンが、

「一生懸命にやって勝つことのつぎにいいことは、一生懸命にやって落ちることなのよ。」と言うシーンがある。これは教員になるための大事な試験の前にアンが友達に言ったセリフだ。私は最初に読んだとき「え、これってどういうこと？」と頭の名が？でいっぱいになった。「一生懸命にやって勝つこと」は理解できる。だけど「つぎにいいことは、一生懸命にやって落ちること」こっちはさっぱりわからない。勝つことよりどうして努力することが大切なのか。

そんな時、五年生の頃に受けたそろばんの三級の検定のことを思い出した。三級からは商工会議所という会場へ行って検定を受けることになっている。だから検定日が決まっていた。その検定日の一ヶ月くらい前。「まだ一ヶ月もあるな」となんとなくぼんやり過ごしていた。気づいた頃には検定日の一週間くらい前になっていた。焦って練習しても遅かった。私は受からなかった。練習していなかったのだからあたりまえの結果だ。それなのに私はくやしくて「受からなかった」という結果を受け入れられなかった。そろばんの三級を一回で受かる人はたくさんいる。「どうしてもっと練習をがんばってやらなかったのだろう」と後悔ばかりだった。

思い出してみてもわかった。努力することが大切なのは後悔しないためだ。努力が足りないと落ちたり、負けてしまった時に、「もっとがんばってれば」と思ってしまふ。そしてその後悔は一生心の奥に残り続けると思う。現に私は今でもその時のことを考えるとくやしさが、はっきり戻ってくる。だから努力して落ちることは努

かしないで落ちるよりずっといい。そういうことをアンは言いたかったのではないだろうか。

アンはライバルのギルバート・ブライスと競争しながら一心に勉強した。そして、『努力のよろこび』というものが、わかりだしたわ。」
と言って、試験のために全力をつくして精一杯がんばった。だからアンはどんな結果になっても受け入れられる気持ちになったのだと思う。たとえ負けて落ちてしまっても、快く受け入れられるなんてすばらしいと思う。「努力のよろこび」とはそういうことだと思った。

私は努力をしないで落ちた。アンは一生懸命努力して一位をとった。私はアンとは反対の事で勝つだけがすべてじゃないとわかった。どれだけがんばって努力するというのも大切だと気づいた。

これから私は受験や試合など勝負する場面にたくさん出会うと思う。だから失敗して遠回りしても最後に「がんばってよかった」と思えるように努力しようと思った。一つの目標にまっすぐあきらめずにがんばるアンを見ならって。